

# 中国語のモーダルマーカ―“必須 (bìxū)”における認識的意味の残存

—類型論と文法化の観点から—

朱 冰 (名古屋大学大学院)

【キーワード】 モダリティ、認識的意味、“必須(的)”、文法化、類型論

## 1. はじめに

現代中国語の“必須”は英語の *must* や日本語の「なければならない」に相当する強い「必要性・義務 (necessity/obligation)」を表すモーダルマーカ―である。朱 (2008) による通時的研究では、“必須”は先に束縛的意味 (deontic meaning) を獲得し、その後 (1) のように「認識的必然性 (epistemic necessity)」の意味も生じたが、その認識的意味が清の時代 (1644-1912) に消滅してしまい、現代中国語では束縛的意味しか残っていないとされている。

(1) 若 使 某 一 月 日 不 见 客, 必须 大 病 一 月。(『朱子語類』1270年)

もし(使役)ある 一か月(否定)会う お客に違いない大いに病にかかる 一か月

「もし一か月お客に会わせなければ、一か月にわたって重病になるに違いない」(朱 2008: 175)

しかし、清以降の用例、特に近年現れた新しい意味用法の中には認識的意味に近い用例が見つかり、認識的意味が消滅したかどうかに関しては議論の余地がある。本研究は文法化の観点から、類型論研究の知見を援用しながら“必須”における認識的意味の残存を考察する。

2. 考察 近年、ドラマのセリフから由来した“必须的”という表現は若者を中心に中国語の話し言葉において広がっている。「モーダルマーカ―“必須”+助詞“的”」という形式はもともと日本語の「ノダ」構文に相当する中国語の「是…的」構文に含まれたり、“的”を付け加えて連体修飾構造を作って名詞を修飾したりして、「必要性」という束縛的意味を表している。しかし、以下のインターネットから収集した例文から分かるように、近年現れた“必须的”は束縛的意味ではなく、英語の *certainly* や *of course* のように話し手の「確信 (certainty)」を示す意味用法で使われていると考えられる。

(2) 我 有 把 人 养 胖 的 好 手 艺! 炒 菜 太 香 了, 哥 哥 姐 姐 不 约 而 同 问

私 持 っ 前 置 詞 人 養 っ 太 っ の よ い 腕 前 炒 め る と っ も お い し い 語 気 助 詞 兄 姉 期 せ ず に っ して 聞 っ く

我 以 后 是 不 是 想 当 个 贤 妻 良 母, 是 啊, 这 是 必须 的, 好 饱 好 饱。

私 将 来 の で は 不 是 だ っ たい な る 量 詞 良 妻 賢 母 コ ピ ュ ー 語 気 助 詞 こ れ コ ピ ュ ー も ち ろ ん の こ と い っ ぱ い い っ ぱ い

「私は人を太らせる上手な腕前を持っている。炒めた料理はすごくうまいから、兄と姉に将来良妻賢母になりたいのと聞かれた。これはもちろんのことだよ。お腹いっぱい。」

(ウェイボ)

「確信」という意味用法は話し手による主観的判断であるため、束縛的意味というより、むしろ認識的意味とより密接に関連している。従って、“必须的”に現れた「確信」の意味は“必須”に存在していた「認識的必然性」の意味に由来したのではないかと推測できる。それは類型論的に説明可能である。Boye (2012)では、「認識的必然性」は「確信」との間に拡張関係が存在していることが通言語的に確認できた一方、束縛的意味といった非認識的意味 (non-epistemic meaning) は「確信」と直接に関連することが確認できなかったという。もしそうであれば、歴史上に生じてまた消えたと言われる“必須”の認識的意味は完全に消滅したのではなく、弱化しているにすぎず、“必须的”の「確信」の意味への拡張において、架け橋のような役割を果たしていると考えられる。

3. 終わりに 本研究は“必须的”に現れた「確信」という新しい意味用法から“必須”における認識的意味の残存を検証した。

【参考文献】 Boye, Kasper (2012) *Epistemic Meaning: A Crosslinguistic and Functional-Cognitive Study*, Berlin/Boston: Mouton de Gruyter / 朱冠明 (2008) 《〈摩诃僧祇律〉情态动词研究》, 中国戏剧出版社

氏名：朱 冰（しゅ ひょう） 所属：名古屋大学大学院  
国際言語文化研究科博士後期課程 E-mail：  
shuhyoo@gmail.com